慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ナポレオン時代史書籍解説 |
| Sub Title | |
| Author | 平山, 榮一(Hirayama, Eiichi) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.137(477)- 170(510) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0137 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ナポレオン時代史書籍解説

平山　榮一

はしがき　ランガー教授鑑修の The Rise of Modern Europe 叢書中の一冊、Europe and the French Imperium 1799—1814., by Geoffrey Bruun, New York, 1938. 紹介の意味で當期研究者のために、同書卷末の參考書解題をこゝに譯述することゝした。

## 一　修史概觀

二十世紀の史家に殘されたる仕事は、汎く正確なる文書の考證に基き、表面に顯はれたる政治の背後に潛める經濟的諸力の活動を一層深く理解して以てナポレオン時代の再建を試むるといふ企圖であつた。ウイン公會以後三十年の間に、一七九九年より一八一四年に及ぶ期間のヨーロッパの發展を說明することを目的とした史書は、ほとんど國民主義的宣傳か、さもなければ沒落せるナポレオンを攻擊せる小冊子の程度を出でず、それにナポレオン部下の官吏によりて出版せられたるより印象的なる自己辯護及びセント・ヘレナよりロマンチックな宣傳文が徐々に加はつたのである。一八三〇年に、ブルボン家がフランスから追放せられてより、ナポレオン傳說は豐富に增加した。皇帝の遺骨は一八四〇年にパリに歸還し、ボナパルチズムの崇拜は一八四八年のルイ・ナポレオン・ボナパルトの選出と三年後に第二帝政をもたらしたクーデターとにより最も華々しき勝利をかち得

た。彼等の眼前にナポレオン傳說の實現したるに對して、史家は恐らく當然であるが、大ナポレオンの性格と事業に對し、より批判的となつた。最初の適當なる文書引照法による、ルイ・アドルフ・チエール (L. A. Thiers) の二十卷本『統領政府及び帝政史』(Histoire du Consulat et de l'Empire, 1845—1862)、アルマン・ルフェーヴル (A, Lefebvre) の三卷本『統領政府及び帝政時代に於けるヨーロッパ內閣史』(Histoire des cabinets de l'Europe pendant la Consulat et l'Empire, 1858—1870) は、文書史料の重要性を一般に知らしめ、三十二卷本『ナポレオン一世の書信』(Correspondance de Napoléon 1er, 1858—1870) は、政府の手に於て編修せられたるも、當代に關する最も暴露的な且つ最も適切な文書資料を利用し得るものとした。第二帝政治下に於けるフランスの政治的不滿は、ナポレオン傳說を衰頽せしめるため、增加する莫大



なる史料を利用せんとの熱意ある批評家の一派を生じた。その著作物の中で注目すべきは、ピエール・ランフレー (P. Lanfrey) の『ナポレオン一世』(Histoire de Napoléon 1er) であり、その第一卷は一八六七年に出た。ナポレオンの光輝に對し、これほど洞察的で且つ組織立つた冷靜なる敍述はかつて現はれなかつた。

當時ラインの對岸にあつてプロシヤ學派の史家は、精神的領域に於て再び自由戰役を戰ひつゝ、常勝の威信の强きにも拘らず傳說の力を失はせつつあつた。ルドヴィヒ・ホイサー (Ludwig Häusser) は、彼の『ドイツ史』(Deutsche Geschichte vom Tode Friedrichs des Grossen bis zur Gründung des deutschen Bundes) を、一八五四年と一八五七年の間に刊行した。ドロイゼン (Droysen) ——彼はランフレーの著作をば暗い時代に、光輝を投じたるものとして賞讚した——とランケ (Ranke)

――彼の『ハルデンベルクとプロシヤ國家の歴史』(Hardenberg und die Geschichte des preussischen Staates, 1793―1813) は一八七九年と一八八一年の間に現はれた――及びもちろんトライチュケ(Treitschke) ――既に彼の『十九世紀ドイツ史』(Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert) を編纂してゐた――は、ビスマルクが第二帝政を破壞することにより第一帝政の榮譽を失はせつゝあつた間に、史神『クリオ』をしてプロシヤの語調で語らしめたのである。冷靜な心をもち、幻滅を感じた多數のフランス人にとり、一八七〇―一八七一年の裁決は、帝政主義に對する審判であり、彼等は、大革命とその成果に對するテーヌの非難を是認した。その評價は『現代フランスの起原』(Les origines de la France contemporaine, 1875―1894) の後の諸卷に表明せられてゐる。

ナポレオン時代に就いての相矛盾せる解釋が、多數の文書や覺書を參照して再檢討せられ、客觀的な公平なる綜合に服すべき時が來た。これはアウグスト・フルニエー(Auguste Fournier) の健實に考察され輝かしく書かれた研究、『ナポレオン一世傳』(Napoleon I. eine Biographie) 三卷 (一八八六―一八八九) によつて表明せられた。それにつゞく二十年間はナポレオンの復活をもたらした。アルベール・ソレル (Albert Sorel) は既に彼の記念碑的なる『ヨーロッパとフランス大革命』(L'Europe et la Révolution française) を書きつゝあつた。フレデリック・マソン (Frédéric Masson) は彼の親しい肖像畫『ナポレオンと女性達』(Napoléon et les femmes) の第一卷を一八九三年に出した。アルチュール・シュケー (Arthur Chuquet) は『ナポレオンの青年時代』(La Jeunesse de Napoléon) の三卷を一八九九年に、アルベール・ヴァンダル (Albert Vandal) は、『ボナパルトの出現』

(L'Avènement de Bonaparte) の第一部を一九〇三年に完成した。ロシヤに於てセルゲー・タチッシェフ (Serge Tatischeff) は彼の啓蒙的なる『アレクサンダー一世とナポレオン』(Alexandre 1er et Napoléon, 1891) を編纂し、イギリスのローズベリ卿 (Rosebery) は『ナポレオンの末路』(Napoleon, The Last Phase, 1900) に於て、寛容なる國民の後ればせの罪亡ぼしを行ひ、またホランド・ローズ (John Holland Rose) は『ナポレオン一世の生涯』(The Life of Napoleon I, 1901) に於てこのコルシカ人の偉大を承認した。一九〇六年に出た『ケンブリッヂ近世史』の第九卷は一七九九—一八一五年に至る時代を包み、適切なる賞讃の極致として『ナポレオン』なる表題を附した。

これらの多數の賞讃の必然的な結果は、ナポレオンが人間ではなくなり、一の時代となつたことであつた。一七九九年から一八一五年に至る多事なる時期を取扱つた覺書、書信、記錄、傳記、史籍及び單行本の無盡藏なる目錄を保存することは、不可能でないまでも、ますます困難を加へて來た。それ故、キルハイゼン (Friedrich M. Kircheisen) は彼の『ナポレオン時代の書籍解題』(Bibliographie du temps de Napoléon, 1908) の第一卷によつてナポレオン修史學の次の段階の來れるを報じたのである。既に出版せられた多量の文獻に組織を立て、評價し、記錄文書を搜索して、缺けたる知識を求め、批評的學問的研究の方法により多くの論爭點を解決することが、研究課程となつた。そして一九一二年にエヅアール・ドリヨー (Edouard Driault) によつて創設された『ナポレオン研究誌』(Revue des études napoléoniennes) はその研究活動を指導する不可缺の機關を提供した。大戰の時期に中絶せるにも拘らず、一七九九——一八一五年に至る間の歐洲史のより廣汎な、より質實

な、より折衷的なる研究は續けられ、大戰後の時代はかくして設けられた基礎が二十世紀の史家に、その時代の眞に包括的なる考察を試むべき有利な地位を與ふることになつた。その證據は從來ナポレオンの歴史の最も閑却されたる方面たりし經濟的領域の活潑なる探求に見ることが出來る。それは最近にメルヴィン(F. E. Melvin)の『ナポレオンの航海制度』(Napoleon's Navigation System, 1919)、エリー・ヘックシャー(Eli Heckscher)の『大陸封鎖の經濟的解釋』(Continental System: an Economic Interpretation)及びタルレ(E. Tarlé)の『大陸封鎖とイタリー』(Le Blocus continental et le Royaume d'Italie, 1928)の如き時宜を得たる研究によつて豐富になつた。從來、爲し得べからざりし程に包括的なる視野とより調和ある綜合の時は來れりといふことの更に進んだ證跡が求められるならば、それは一九三四年に第九卷を出したキルハイゼンの學問的で包括的なる傳記『ナポレオン一世、その生涯と時代』(Napoleon I, sein Leben und seine Zeit)の進程に見られ、ドリヨーの概觀五卷の『ナポレオンとヨーロッパ』(Napoléon et l'Europe, 1910—1927)、またパリゼー(G. Pariset)の思慮に富み、客觀的なる一卷『統領政府と帝政』(Le Consulat et l'Empire, 1921)、ブールギン(G. Bourgin)の『ナポレオンとその時代』(Napoleon und seine Zeit, 1925)及びルフェーヴル(G. Lefebvre)の『ナポレオン』(Napoléon, 1935)にも見られる。フリードリヒ(H. E. Friedrich)の『ナポレオン一世、その思想と國家』(Napoleon I., Idee und Staat, Berlin, 1936)は、最近ヨーロッパの發展の見地より見たるナポレオンの國内及び對外政策の基礎的觀念の刺戟に富む再檢討である。

## II 書籍解說的資料

紙面の制限は此處に未刊史料の所在地とその價値の敍述を許さない。印行文獻の研究にとり以下の指導書は有益である。F. M. Kircheisen, Bibliographie des napoleonischen Zeitalters (Berlin, 1920) 及び Bibliographie du temps de Napoléon comprenant l'histoire des États-Unis, 2 vols. (Paris, 1908—1912); G. Davois, Bibliographie napoléonienne française jusqu'en 1908, 3 vols. (Paris, 1909—1911). A Lumbroso は Saggio di una bibliografia ragionata per servire alla storia dell'epoca napoleonica, (Modena and Rome, 1894—1896) に着手し、最初の五分冊のみが出た。當代に關する書籍及び事項の最も便利な一卷の概觀で、簡潔、批判的、すべてを網羅せるものであるが、その强調と選擇に於てフランス中心的なるものは、L. Villat の La Révolution et l'Empire, part II, Napoléon, 1799—1815 (Paris, 1936) であり、Introduction aux études historiques 叢書の第八卷をなす。より一般的に利用せられるものは次の諸著にある選擇せる書籍解題である、卽ち A. Fournier, Napoleon the First, a biography, ed. by E. G. Bourne (New York, 1903); Cambridge Modern History, vol. IX, Napoleon (Cambridge, 1906); Histoire de la France contemporaine, ed. by E. Lavisse, vol. III, Le Consulat et l'Empire, by G. Pariset (Paris, 1921) 及び Peuples et Civilisations, ed. by L. Halphen and Ph. Sagnac, vol. XIV, by G. Lefebvre, Napoléon (Paris, 1935).



範圍のより一般的なるものは、A Guide to Historical Literature, ed. dy W. H. Allison, S. B. Fay, A. H. Shearer, and H. R. Shipman (New York, 1931); A. Grandin, ed., Bibliographie générale des

sciences juridiques, politiques, économiques et sociales de 1800 à 1925—26, 3 vols. (Paris, 1926)、また現時の出版としては、P. Caron, ed., International Bibliography of the Historical Sciences (1926—) があり、一年一卷を以てその時に出た歴史著作物及び重要な事項を列擧すべく努めてゐる。個別的國家及び地域的研究にとつて參照すべきものは、P. Caron, ed., Bibliographie des travaux publiés de 1866 à 1897 sur l'histoire de France depuis 1789, (Paris, 1907—1912) 及び補遺に得られるが次の諸著もある。B. Sánchez Alonzo, Fuentes de la historia española (Madrid, 1919); F. Lemmi, Il Risorgimento, guide bibliografiche (Rome, 1926) は、一七四八—一八七一年の時代に及ぶ、R. J. Kerner, Slavic Europe, a selected bibliography in the western European languages (Cambridge, Mass., 1918); F. C. Dahlmann and G. Waitz, Quellenkunde der deutschen Geschichte, 9th rev. ed. (Leipzig, 1931); 及び J. B. Williams, Guide to Printed Materials for English Social and Economic History, 1750—1850, 2 vols. (New York, 1926). 一七八九—一八一五年の時代の英國史の一般的書籍解題は、未だ現はれてゐない。限られたる問題に關する最近の文獻の批判的概說は、Cahiers de la Révolution française, ed. by Ph. Sagnac (Paris, 1934——) に現はれつゝあり、ナポレオン研究の進歩は、歴史研究誌にしばしば現はれる記事に解說されてゐる。例へば W. E. Lingelbach, "Historical Investigation and the Commercial History of the napoleonic Era", American Historical Review, XIX, (1914), 256—279; E. Driault, "Les études napoléoniennes en France et hors de France," Revue des études napoléoniennes, XXI (1923), 7—14, 及び G. M. Dutcher の思慮あり、洞察的なる貢獻、

即ち "Tendencies and Opportunities in Napoleonic Studies," American Historical Association, Annual Report, 1914, vol. I (Washington, 1916), 179–220 より、"Napoleon and the Napoleonic Period," Journal of Modern History, IV (1932), 446—463 に至るもの。

## 三　通　史

一七九九—一八一五年の時代に於けるヨーロッパ全般を取扱つた最良の一巻本は、今や一般的になりつゝある協同執筆叢書に見出される。最も注目すべきものとしては次の如くである。E. Lavisse and A. Rambaud, ed., Histoire générale du IVe siècle à nos jours, 3rd ed. rev., vol. IX (Paris, 1925); The Cambridge Modern History, vol. IX, Napoleon (Cambridge, 1906), その書籍解説を拔いた普及版(1934); L. M. Hartmann, ed., Weltgeschichte in gemeinverständlicher Darstellung, vol. VII, part II, by G. Bourgin, Napoleon und seine Zeit (Gotha, 1925) は簡潔、論理的である。W. Goetz, ed., Propyläen Weltgeschichte, vol. VII; by A. Stern, Die grosse Revolution, Napoleon und die Restauration, 1789—1848 (Berlin, 1929) は申分なく、美しき繪入である。L. Halphen and Ph. Sagnac, ed., Peuples et Civilisations, vol. IX, by G. Lefebvre (Paris, 1935) は立派に客觀的である。英語の讀者に便利な、選擇せる書籍解題を附した教科書は H. E. Bourne の論理的な概觀、Revolutionary Period in Europe, 1763—1815 (New York, 1914), L. R. Gottschalk, The Era of the French Revolution, 1715—1815 (Boston, 1929), 及び L. Gershoy, The French Revolution and Napoleon (New York, 1932) である。

九卷で完結せる F. M. Kircheisen の記念碑的

傳記、Napoleon I, sein Leben und seine Zeit (Munich, 1911—1934) は現存一流のナポレオン史家の大著であり、當時の實際の歴史をなしてゐる。同樣に價値あるものは、五卷本 J. E. Driault, Napoléon et l'Europe (Paris, 1910—1927) であり、それに伴ふ二つの外周をなす研究 Napoléon en Italie, 1800—1812 (Paris, 1906) 及び La Politique orientale de Napoléon, 1806—1808 (Paris, 1904) がある。Driault は、近東問題を以て彼の研究を開始し、それは引續いて彼のナポレオンの政策の解釋を形成することになつた。大革命時代を通じて國際事件の研究にとり、傑出した著作は、なほ A. Sorel, L'Europe et la Révolution française, 8 vols. (Paris, 1895—1904) である。Sorel にとつて、大革命時代に於けるフランスの優越は、歴史の趨勢に反する異常事であり、ナポレオンの天才を以てしても、豫言し得べき勢力均衡の復古を妨げ得なかつたと考へられた。

## 四　政治史

近代の政治史は、行政的單位としての領土的國家の概念にあまり左右せられてゐるために、國家以外の表題の下にそれらを排列せんとの企圖は混雜を招くであらう。次の諸項目に於て、廣き分類を加へることが、左程困難でない場合は、大陸に中心點を置く著作を先づ擧げることにした。

### 一、イギリス

この部に於ける標準的著作は W. Hunt and R. L. Poole, ed., Political History of England, 12 vols. (London, 1905—1910), vol. XI, by G. C. Broderick and J. K. Fotheringham で一八〇一年より一八三七年に至る間を取扱つてゐる。A. F. Freemantle, England in the Nineteenth Century, vol. I and II (London, 1929—1930) は、一八〇一—一八一〇年

に至る年間の歴史をより詳述してゐる。ナポレオン戰役の後半に於けるイギリス人の生活の分析に於ては、E. Halévy, History of the English People,（英譯）が、魅力と客觀性に於て無比である。イギリスの戰爭の努力は J. H. Rose の例の明晰と洞察を以て、Pitt and the Great War (London, 1911) に論ぜられてをり、この初期に就いては、O. Brandt, England und die Napoleonische Weltpolitik (Heidelberg, 1916) が、英佛抗爭の相違せる方向に關する有能な解釋であるが、この問題の最も廣汎にして、健實なる取扱ひは、なほ、P. Coquelle, Napoléon et l'Angleterre (Paris, 1904) である。十九世紀初期に於けるアイルランド史は、J. O'Connor, History of Ireland, 2 vols. (London, 1925), vol. I に於て、立派に、相當公平に取扱はれてゐる。

二、フランス

L. A. Thiers, Histoire du Consulat et de l'Empire, 20 vols. (Paris, 1845–1862),（英譯十二卷）は、なほ相當の權威を失はず、特に行政の細目に於て有益である。より新著で、最も注目すべきものは、L. de Lanzac de Laborie, Paris sous Napoléon, 8 vols. (Paris, 1905—1913) であり、その最初二卷が內容上、特に政治的である。G. Pariset, Le Consulat et l'Empire (Paris, 1921), vol. III of the Histoire de France contemporaine, E. Lavisse 編は、立派なる均衡を保ち、明快で、特殊事項の秀れた書籍解說を有する。L. Madelin, Le Consulat et l'Empire (Paris, 1932—1934), 2 vols. は F. Funck-Brentano 編 Histoire de France racontée à tous 叢書の第七卷をなし、Madelin の例によつて華かに書かれてゐるが、論調やゝカトリック辯護的で、ナポレオンに對し、過大の尊敬を拂つてゐる。ナポレオンの權力獲得に就いては、A Vandal,

L'Avènement de Bonaparte, 2 vols. Paris, 1902—1907)が、彼の沒落に就いては、H. Houssaye, 1814 (Paris, 1888) 及び 1815, 3 vols. (Paris, 1898—1925) が無比である。

獨裁權の確立に至る段階を、最近に再分析したものは、Ph. Sagnac, "L'Avènement de Bonaparte à l'Empire : le consulat à vie," Revue des études napoléoniennes, XXIV (1925), 133—154, 193—211. 及び L. Villat," Napoléon empereur : l'organisation du nouvel empire," Revue des cours et conférences, XXVIII (1927), 140—159, 537—558. である。フランス各縣の行政に關しては、J. Regnier, Les Préfets du Consulat de l'Empire (Paris, 1913) 及び A. Aulard の、Etudes et leçons, VII (Paris, 1913), 113—195. に於ける "La Centralisation napoléonienne : les préfets" が批判的で示唆に富み、今や地方的に行はれる調査の增加しつゝある數と對比せられる、それに就き、R. Durand の Le Département des Côtes-du-nord sous le Consulat et l'Empire, 1800—1815, 2 vols. (Paris, 1926) は著しい例である。

1つの閑却せられた問題、即ち行政部の侵害に對して立法部の與くした抵抗は、A. Gobert, L'Opposition des assemblées pendant le Consulat, 1800—1804 (Paris, 1925) に於ける論題となつた。また決して閑却せられた分野ではないが、西部諸縣に於ける內亂は、L. Dubreuil, Histoire des insurrections de l'Ouest に於ける、事實に基づく、冷靜なる研究の主題とせられ、その第二卷 (Paris, 1930) は、綿密な著作たる E. Gabory, Napoléon et la Vendée (Paris, 1914) と相竝ぶ地位を占める。帝政への反對が、フランス社會の持續的要素として存したことは、L. Madelin が、彼の半通俗講演たる、Le contre-révolution sous la Révolution, 17

89—1815 (Paris, 1935) に於て、新たに示した如くである。警察が、政治的不平者を如何に巧みに監視したかは、E. d'Hauterive が編纂し、壓縮した記錄たる La Police secrète du premier empire : bulletins quotidiens adressés par Fouché à l'empereur, 3 vols (Paris, 1908—1922) に明かであり、また王黨の初期の活動は、彼の Le Contre police royaliste en 1800 (Paris, 1931) にたどられてゐる。ナポレオンに對する陰謀の失敗は、既に E. Daudet, La Police et les Chouans sous le Consulat et l'Empire, 1800—1815 (Paris, 2nd ed., 1895) に分析せられ、また祕密の戰爭の犧牲者は、J. Destrem, Les Déportations du Consulat et l'Empire (Paris, 1885) に擧げられてゐる。

三、ドイツ諸邦

F. Meinecke, Das Zeitalter der deutschen Erhebung, 1795—1815, 2nd ed. (Bielefeld, 1913) は、



これらの困難な諸年間の秀れた概觀である。古い著作では、W. Oncken, Das Zeitalter der Revolution, des Kaiserreiches und der Befreiungskriege, 2 vols. (Berlin, 1884—1886) 及び A. Rambaud, La Domination française en Allemagne, 2 vols., 4 th ed. (Paris, 1897) が、學問的で、今なほ有益である。H. A. L. Fisher は、ナポレオンの目的を、彼の Studies in Napoleonic Statesmanship : Germany (Oxford, 1903) に於て明晰に同情ある評價を下した。より新しく、より好意的ならざる評價は、E. Hölzle, "Das napoleonische Staatssystem in Deutschland," Historische Zeitschrift CXLVIII (1933), 277—293. に與くられた。G. Servières, L'Allemagne française sous Napoléon 1er (Paris, 1904) は、フランスの併合の時に於けるライン諸市を評論してゐる。Ch. Schmidt, Le Grand-duché de Berg, 1806—1818 (Paris, 1905)、及び R. Göcke

and T. Ilgen, Das Königreich Westfalen (Düsseldorf, 1888) は、表題の領土に就いて同様の記述をなしてゐる。プロシヤの役割に就いて、G. S. Ford は二個の思慮あり、啓發的なる研究を貢獻した、即ち、Hanover and Prussia, 1795—1803; A Study in Neutrality (New York, 1903) 及び Stein and the Era of Reforms in Prussia (Princeton, 1922). J. M. E. G. Cavaignac, La Formation de la Prusse contemporaine, 2 vols. (Paris, 1897—1898) は、エナ戰後、フランスの範例が改革の指導に力ありしことを强調してゐる。J. R. Seeley の興味あり、今なほ有益な著作たる Life and Times of Stein, 3 vols. (London, 1870) はその副題、Germany and Prussia in the Napoleonic Age の方がよく説明する。エナ戰前の危急の年間に於けるプロシヤの政治に對して、最近、新たなる光明を投じたものは、K. Griewank, "Hardenberg und die preussische Politik 1804—1806", Forschungen zur Brandenburgischen und Preussischen Geschichte, XLVII (1935), 227—308 であり、プロシヤ文書よりの不可缺の史料は、今や叢書 Die Reorganisation des preussischen Staates unter Stein und Hardenberg にあらはれつゝあり、その第一卷、第一部 Allgemeine Verwaltungs-und Behördereform は既に刊行を見た (Leipzig, 1931)。

四、オーストリヤ

プロシヤと對照して、ハプスブルグ家の領土は、革命時代の史家によりやゝ閑却せられてゐる。L. Léger, History of Austria-Hungary, ed. by W. E. Lingelbach (Philadelphia, 1906) は、今はやゝ時代後れとなつた名著の英譯である。J. Bryce, The Holy Roman Empire, rev. ed. (London, 1919) は、この古き組織に關する古典的研究であるが、その終章のみが、こゝに相當する。より特殊に取扱つ

た歴史としては、E. Wertheimer, Geschichte Österreichs und Ungarns im ersten Jahrzehnt des XIX. Jahrhunderts, 2 vols. (Leipzig, 1884—1890) 及び A. Beer, Zehn Jahre österreichischer Politik, 1801—1810 (Leipzig, 1877) がある。神聖ローマ帝國の滅亡は H. von Srbik, Das österreichische Kaisertum und das Ende des Heiligen Römischen Reiches, 1804—1806 (Berlin, 1927) に於て、短かい檢屍の主題となされた。國民精神の勃興に就いては、W. C. Langsam, The Napoleonic Wars and German Nationalism in Austria (New York, 1930) が刺戟に富み、學問的で、よく選擇された書籍解說を有する。A. Robert, L'Idée nationale autrichienne et les guerres de Napoléon (Paris, 1933) は特に、オーストリヤの過去に對する誇りの復活を强調する。帝國内の少數諸民族に就いては、G. Cassi, "Napoléon, l'Autriche et les nationalités," Revue des études napoléoniennes, XV (1919), 34—35 は滿足ではなくとも、示唆的である。一八〇五年に、バヴァリヤの主權の下に移された、豪膽なるチロル人の狀態に關して見るべき書は、J. Hirn, Tirols Erhebung im Jahre 1809, 2nd ed. (Innsbruck, 1909) 及び I. Caracciolo, Andrea Hofer nella insurrezione anti-bavarese del 1809, (Bologna, 1927) である。自由戰役に於けるオーストリヤの役割に就いては H. Oncken. Österreich und Preussen im Befreiungskriege, 1813—1815, 2 vols. (Berlin, 1876—1879) がある。



五、ロシヤ

英語で利用されるロシヤ史の大著の中で、アレクサンダー一世の治世に就いて最も有益なものは V. O. Kluchevsky, A History of Russia, translated by C. J. Hogarth, vol. V (London, 1931), A. A. Kornilov, Modern Russian History……from the

Age of Catherine the Great to the Present, (英譯改訂版) (New York, 1924) 及び古いけれどもなほ秀れた著作たる A. N. Rambaud, Popular History of Russia from the Earliest Times, new ed., 2 vols. (New York, 1904) である。フランス語では、Ch. Seignobos, P. Milioukov, 及び L. Eisenmann の編輯の下に公刊された Histoire de Russie, vol. II (Paris, 1933) が明晰で、論調近代的である。ドイツ語では、K. Stählin, Geschichte Russlands, vol. III, Vom Kaiser Paul bis zum Ende des Krimkrieges が重厚で、常套的ではあるが、健實である。同樣に信頼し得べく、またより讀み易きものは、K. Waliszewski の史的傳記たる Le Fils de la grande Catherine, Paul 1er, empereur de Russie (Paris, 1912), (英譯) Paul I of Russia (London, 1913), 及び Le règne d'Alexandre 1er, 3 vols. (Paris, 1923—1925) である。

六、イタリー

イタリー語で書かれた當時のよき一般的概觀は G. de Castro, Italia dal 1799 al 1814, vol. VII of the Storia politica d'Italia scritta da una società di amici, 8 vols., ed. by P. Villari (Milan. 1874–1882) であり、また F. Lemmi and V. Fiorni, Storia d'Italia dal 1799 al 1814 (Milan, 1918) 及び E. Driault, Napoléon en Italie, 1800—1812 (Paris, 1912) がある。キサルピナ共和國の歴史は、今や立法の記錄たる七卷まで刊行の Assemblee della Repubblica Cisalpina, ed. by C. Montalcini and A. Alberti (Bologna, 1917—　　) によつて豐富になりつゝある。A. Pingaud は彼の著、La Domination française dans l'Italie du nord, 1790—1805, 2 vols. (Paris, 1914) を、ナポレオンによつて創設されたイタリー王國に關する史學雜誌に出した無數の特殊研究によつて補足した。G. B.

McClellan, Venice and Bonaparte (Princeton, 1931); L. Madelin, La Rome de Napoléon (Paris, 1904); P. Marmottan, Bonaparte et la république de Lucques: le royaume d'Etrurie (Paris, 1896); J. Borel, Gênes sous Napoléon (Paris, 1929) 及び R. M. Johnston, The Napoleonic Empire in Southern Italy and the Rise of the Secret Societies, 2 vols. (London, 1904) は、個別的大國を取扱つてゐる。この時期の終末の散漫なる取扱は M. H. Weil, Le Prince Eugène et Murat, 5 vols. (Paris, 1902) 及び Joachim Murat, roi de Naples, 5 vols. (Paris, 1909—1910) に於て與へられてゐる。

七、スペインとポルトガル

G. F. White, A Century of Spain aud Portugal, 1788—1898 (London, 1909) は、ナポレオン時代を取扱つてゐるが、深味を缺く。H. Baumgarten, Geschichte Spaniens vom Ausbruch der französischen Revolution bis auf unsere Tage, 3 vols. (Leipzig, 1865—1871) は、一七八八—一八三九年間に就いて今なほ價値を有する。R. Altamira y Crevea, Historia de la nacion y de la civilizacion española, 4 vols., rev. ed. (Barcelona, 1913—1914) の第四卷は、考察範圍廣く、論調近代的である。フランスの見地よりせるものは、A. Fugier, Napoléon et l'Espagne, 2 vols. (Paris, 1930) が秀れてゐるが、一八〇八年にとゞまつてゐる。それは Geoffroy de Grandmaison, L'Espagne et Napoléon, 3 vols. (Paris, 1908—1931) によつて補正せられねばならぬ。終末の事件に就いては P. Vidal de la Blache, L'Evacuation de l' Espagne (Paris, 1914) 及び以下擧げる戰史がある。

八、諸小國

ナポレオン時代に於けるスカンヂナヴィヤ諸國に就いて、英語では殆んど特殊研究が現れず、も

た英語で利用される國民史は、單に概括的にその時代を取扱ふに過ぎない。最も滿足すべきものは K. Gjerset, History of the Norwegian People, 2 vols. (New York, 1915) 及び G. Hallendorff and U. Schück, History of Sweden (Stockholm, 1929) である。スウェーデンの、一八一〇—一八一四年に於ける大事件への關係は、F. D. Scott, Bernadotte and the Fall of Napoleon (Cambridge, 1935) に於て美事に分析され、十九世紀に於けるフィンランド國民主義の起原は、J. M. Wuorinen, Nationalism in Modern Finland によつて論ぜられた。ベルギーに關して標準的な著作は、H. Pirenne, Histoire de Belgique, 6 vols. (Brussels, 1900—1926) であり、その第六卷が此處に相當する。フランス行政の方法と結果は、L. Lanzac de Laborie, La Domination française en Belgique, 1795—1814 (Paris, 1895) の二卷に、述べてある。P. J. Block, History of the People of the Netherlands, (英譯) 5 vols. (New York and London, 1898—1912) は地味な敍述であり、ナポレオン時代を含むその第五卷は、H. T. Colenbrander の De Bataafsche Republiek より Vestigang van het Koninkrijk, 1813—1815 (Amsterdam, 1908—1927) に至る諸研究よりも、詳細でなく、またはるかに興味も乏しい。スイスに關しては、W. Oechsli のすぐれた敍述は、英語で利用される、即ち History of Switzerland, 1499—1914 (Cambridge, 1922)。フランスが優越權をふるつた年間は E. Guillon, Napoléon et les suisses, 1803—1815 (Paris, 1910) に於て、またその時代の終末に於けるスイスの地位は W. Martin, La Suisse en l'Europe, 1813—1814 (Lausanne, 1931) に於て述べられてゐる。ナポレオンに處分せられたポーランドは、M. Handelsmann, Napoléon et la Pologne (Paris, 1909) 及び A.

Mansuy, Jérome Napoléon et la Pologne en 1812 (Paris, 1931) に於て論ぜられてゐる。

九、バルカン諸國及び近東

バルカン諸國の勃興に關し、數個の有益な、信頼すべき記述が英語で利用される、即ち、F. Schevill, Hitsory of the Balkan Peninsula from the earliest times to the present day (New York, 1922) は、その表題のよく示す如くであり、R. W. Seton-Watson, Rise of Nationality in the Balkans (London, 1917) 及び W. Miller, The Ottoman Empire and its Successors, 1801—1927 (London, 1928) は、より限られた時代を取扱ふ。N. Iorga, Geschichte des Osmanischen Reiches は第五卷 (Gotha, 1913) に於て革命時代を含むも、彼の取扱は、新しき見解を述べるといふよりはむしろ詳密で、よく簡約せられてゐる。O. von Schlechta-Wssehrd, Die Revolutionen in Constantinopel, 1807, 1808



(Vienna, 1882) は、今なほそのトルコ史料の使用を以て價値あり、またセリム三世の時代に於ける一般の改革問題をよく取扱つたものは、Harold Temperley, England and the Near East, the Crimea (London, 1936) 及び N. Mouschopoulos, "Le Despotisme éclairé en Turquie," Bulletin of the International Committee of the Historical Sciences, IX (1937), 147—181. である。セルビヤの叛亂に關する舊著、S. Novakovič, Die Wiedergeburt des serbischen Staates (Sarajevo, 1912) 及び Yakchič, L'Europe et la résurrection de la Serbie, 1804—1834 (Paris, 1917) は、今や E. Haumant, La Formation de la Yougoslavie (Paris, 1930) によつて補足せられるであらう。E. Driault, La Politique orientale de Napoléon, 1806—1808 (Paris, 1904) は包括的で、刺戟に富む。P. F. Shupp, The European Powers and the Near Eastern Question,

1806—1807 (New York, 1931) 及び Paul Rüter, Die Türkei, England und das russisch-französische Bündnis, 1807—1812 (Emsdetten, 1935) は、嚴格に國際的な見地より、ほゞ同一の地方を取扱つてゐる。エジプトの支配についての英佛の抗爭に關しては、F. Charles-Roux の諸著、特に L'Angleterre et l'expédition française en Egypte, 2 vols. (Paris, 1925) が見らるべく、また次の諸著も同樣である、G. Douin, L'Angleterre et l'Egypte: la politique mameluke, 1801—1807, 2 vols. (Cairo, 1929—1930); E. Driault, Mohamed Aly et Napoléon, 1807—1814 (Cairo, 1925); S.Ghorbal, The Beginnings of the Egyptian Question and the Rise of Mehemet Ali (London, 1928).

## 一〇、植民地

J. Saintoyant, La Colonisation française pendant la période napoléonienne 1799—1815 (Paris, 1931) は、最も新しい研究で、主要な權威者の筆になるものである。C. L. Lokke, France and the Colonial Question: A study of contemporary French opinion, 1763—1801 (New York, 1932) は、秀れてをり、Lokke の史學雜誌に於ける附屬的記述を伴ふべきである、特に、"French Dreams of Colonial Empire under the Directory and Consulate," The Journal of Modern History, II (1930), 237—250. かゝの如き夢の一つで、挫折し、今日は全く忘却されたものについては、E. Scott, Terre Napoleon: a History of French Explorations and Projects in Australia (London, 1910) を見よ。B. Moses は、Spain's Declining Power in South America, 1730—1806 (Berkeley, California, 1919) をたどり、H. T. Manning は、British Colonial Government after the American Revolution, 1782—1820 (Oxford, 1934) を研究した。ルイジャナ問題に關する

多量の文獻の中で注目すべきものは、F. P. Renaut, La Question de la Louisiane, 1796—1803 (Paris, 1919), E. W. Lyon, Louisiana in French Diplomacy (Norman, Okla., 1933) 及び Bonaparte's Proposed Louisiana Expedition (Chicago, 1934), A. P. Whitaker, The Mississippi, 1795—1803, a study in trade, politics, and diplomacy (New York, 1934) と附隨せる短かき外周をなす特殊研究、及び S. S. Aiton, "The Diplomacy of the Louisiana Cession," American Historical Review, XXXVI(1931), 701—720 がある。

## 五 憲法及び法制史

大革命時代の憲法的實驗を促がした政治學說を有益に記述せるものは、W. A. Dunning, History of Political Theories from Rousseau to Spencer (New York, 1920) である。A. Lewkowitz は、同



じ範圍に於ける、鋭い、示唆的なる研究を、Die klassische Rechts-und Staatsphilosophie, Montesquieu bis Hegel (Breslau, 1914) に於て與へた。フランスに關して、憲法問題の最も明確な、最も客觀的なる取扱は、M. Deslandres, Histoire constitutionelle de la France de 1789 à 1870. (Paris, 1932) で、第一卷は一七八九—一八一五年を述べてゐる。Ph. Sagnac の啓蒙的なる分析、La Législation civile de la Révolution française, 1789—1804 (Paris, 1898) は、立法に反映せる革命的イデオロギーの發生と衰微をたどつてをり、同樣の傾向は C. Brinton, French Revolutionary Legislation on Illegitimacy (Cambridge, Mass., 1936) に於て特殊問題として、巧みに述べてある。當時に於けるドイツの憲法的理想の混亂せる狀態は、A. Berney, "Reichstradition und Nationalstaatsgedanke, 1789—1815," Historische Zeitschrift, CXL (1929),

57—86 によく示唆せられ、また專制政治と代議政治の原則の間の衝突は、P. Rain, "Alexandre Ier et la Pologne: un essai de gouvernement constitutional, 1815—1825," Revue d'histoire diplomatique, XXVI (1912), 74—101. によつて明かにせられた。ナポレオンの國際法の觀念に關する面倒な問題は、E. Chevalley, Essai sur le droit de gens napoléonien, 1800—1807 (Paris, 1912) に於て檢討せられ、既存の慣習が、ナポレオンの總體的行動の多くをば、認められたる報復の規定の下に、承認したといふ結論に導いたが、B. Mirkin-Gecevič は、"L'Influence de la Révolution française sur le developpement du droit international dans l'Europe orientale", Recueil des cours de l'Académie de droit international, XXII (1928), 295—456. に於て反對の結論、卽ちナポレオンの詭計と無法が人々の良識を驚かし、國際法の眞正なる通則への要求を刺戟した、といふことを强調してゐる。大革命時代を通じ、ヨーロッパに於て制定せられた多數の憲法の表に就いて、またそれらが見出される最も有益な蒐集の批判的評價に就いては、H. B. Hill, "The Constitutions of Continental Europe", The Journal of Modern History, VIII (1936), 82—94. を見よ。

## 六　經濟史

E. Tarlé, "L'Unité économique du continent européen sous Napoléon Ier," Revue historique, CLXVI (1931), 239—255. は、フランス人によつて、彼等の政治的優越の自然の結果として求められた經濟的覇權の、全般的ではあるが、やゝ獨斷的の概括である。P. Darmstädter, "Studien zur napoleonischen Wirtschaftspolitik," Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, II (1904), 559—615,

III (1905), 112—141. は、はるかに注意深き研究の結果を提示してをり、しばしば後の著作家に引用せられた。E. Heckscher, The Continental System, an economic interpretation (Oxford, 1922) は、その問題に關する最良の一卷の研究書である。卓拔であるが、容易に得られぬ、一の短かき特殊研究は、G.Drottboom, Wirtschaftsgeographische Betrachtungen über die Wirkungen der napoleonischen Kontinentalsperre auf Industrie und Handel (Bonn, 1906) である。土地制度の變化を概觀する全般的研究で、その問題の權威者によつて書かれたものは、H. Sée, Esquisse d'une histoire du régime agraire en Europe aux XVIIIe et XIXe siècles (Paris, 1921) である。フランスの財政の狀態に就いては、R. Stourm, Les Finances du Consulat (Paris, 1902) が明晰で、批判的であるが、やゝナポレオンに對し好意的でない。M. Marion, Histoire financière de la France depuis 1715 の第四卷 (Paris, 1921) は、一七九七—一八一八年を取扱つてゐるが、これまた非難的である、しかしフランスの國民的信用の不安定の主たる責任を、革命諸議會の誤りに置いてゐる。S. de la Rupelle, "Les Finances de la guerre de 1796 à 1815," Revue des sciences politiques, VII (1892), 25—62. は、ナポレオン戰役の結果たる異常な收入の分析に於て、今なほ價値がある。E. Tarlé は、"Napoléon 1er et les intérêts économiques de la France," Revue des études napoléoniennes, XXVI (1926), 117—137. に於て、帝政フランスの經濟學を明瞭ならしめ、また F. E. Melvin は、Napoleon's Navigation System (New York, 1919) に對して、冷靜な思慮ある特殊研究を以て同樣のことをなした。フランスの商工業に就いて、注目すべき權威書に E. Lavasseur, Histoire du commerce en France, vol. II (Paris,

1912) 及び、Histoire des classes ouvrières et de l'industrie en France depuis 1789 à 1870, vol. I rev. ed. (Paris, 1903) がある。Ch. Ballot, L'Introduction du méchanisme dans l'industrie française (Lille, 1923) は（著者が一九一七年にヴェルダンで戰死するまで）、フランス工業の機械化は、一八一五年以前に於て一般に考へられて來たよりも、より廣くまた獨立的に進行してゐたことを示すべき證據を集めた。フランス支配下の北イタリーに就いては、E. Tarlé, Le Blocus continental et le royaume d'Italie, new ed. (Paris, 1931) 及び A. Pingaud, "Le Premier royaume d'Italie: l'œuvre financière," Revue d'histoire diplomatique, XLIV (1930), 269—287, 435—449. を見るべく、またイリリヤ地方に就いては、M. Pivec-Stele, La Vie économique des provinces illyriennes, 1809—1813 (Paris, 1930) を見るがよい。イギリスに就いては、



N. J. Silberling, "Financial and Monetary Policy of Great Britain during the Napoleonic Wars," Quarterly Journal of Economics, XXXVIII (1924), 214—233, 397—439. が正確なる報告の概要を明瞭に述べたものである。A. Cunningham, British Credit in the last Napoleonic War (Cambridge, 1910) は、一八〇三年より一八一四年に至る英佛經濟的抗爭の短かきも有益なる特殊研究である。W. F. Galpin, The grain supply of England during the Napoleonic Period (Philadelphia, 1925) は、論爭された問題の綿密な檢討であり、當時イギリスが切實な食糧不足に面したといふ危機を輕視してゐる。イギリスの商船とその組織は、C. N. Parkinson, Trade in the Eastern seas, 1793—1813 (Cambridge, 1937) に於て、よく描寫せられてゐる。ロシヤに就いて英語での最良の著述は、J. Mavor, Economic History of Russia, 2nd rev. ed.

(New York, 1926), vol. I. である。

## 十　社會史

フランスに就いて、J. Jaurès 編の Histoire socialiste, VI, P. Brousse and H. Thurot, Le Consulat et l'Empire (Paris, 1905) の當時に相當する卷は有益であるが、その叢書の一般的標準からは多少見劣りがする。十九世紀の初年に於けるフランス社會の狀態は、G. Hanotaux, "La Transformation sociale à l'époque nopoléonienne," Revue des deux mondes, XXIII (1926), 89—123, 562—597. に於て描かれた。A. Aulard は Paris sous le premier empire : recueil des documents pour l'histoire de l'esprit public à Paris, 3 vols. (Paris, 1912—1923) に於て、輿論の狀態に就き、多くの光明を投じ、また L. de Lanzac de Laborie は Paris sous Napoléon, 8 vols. (Paris, 1905—1913) に於て、社



會生活及び貧民の狀態に就き、特に第三、五卷に於て、豐富な細事を述べてゐる。勞働階級に就いては、既に擧げた E. Levasseur, Histoire des classes ouvrières et de l'industrie française depuis 1789, vol. II, rev. ed. (Paris, 1904) 及び G. Mauco, Les Migrations ouvrières en France au début du XIX^e siècle (Paris, 1932) を見よ。プロシヤに於ける農奴制の廢止は、古いけれども有能な研究たる G. F. Knapp, Die Landarbeiter in Knechtschaft und Freiheit (Leipzig, 1891) に論ぜられた。ナポレオン時代の終末に於けるイギリスの民衆不滿に就いては、最近の研究たる、F. O. Darvall, Popular Disturbances and Public Order in Regency England……1811—1817 (New York, 1934) があり、また勞働階級の苦酷な運命に就いては、三個の、よく文書引照をなせる特殊研究的提訴がある。即ち J. L. and B. Hammond, Village Labourer, 17

60—1832, new ed. (London, 1920), Town Labourer, 1780—1832 (London, 1917), 及び Skilled Labourer 1760—1832 (London, 1919) である。

## 八　外交史及び國際關係

大革命時代に於ける大小のヨーロッパ諸國の對外政策に關する傑出した著作は、Albert Sorel, L'Europe et la révolution française, 8 vols. (Paris, 1895—1904) である。すべてを網羅し、學問的であり、流暢な、燦然たる文體を以て書かれ、今なほこの方面では卓越してゐるが、中心思想に於て露骨にフランス中心的である。當時の對外政策研究の一卷の最良書は、E. Bourgeois, Manuel historique de politique étrangère, vol. II, Les révolution, 1789—1830, 6th ed. (Paris, 1920) である。イギリスに就いては、A. W. Ward and G. P. Gooch, Cambridge History of British Foreign Policy, 1783—1919, 3 vols. (Cambridge, 1922—1923), vol. I があり、ロシヤに就いては包括的なる研究、S. S. Tatischeff, Alexander 1er et Napoléon d'après leur correspondance inédite, 1801—1812 (Paris, 1891) 及び A. Vandal, Napoléon et Alexandre 1er: l'alliance russe sous le premier empire, 3 vols. (Paris, 1891—1896) があり、オーストリヤに就いては、C. S. Buckland, Metternich and the British Government from 1807 to 1813 (London, 1932)、プロシヤに就いては、K. A. von Hardenberg, Denkwürdigkeiten, 5 vols., ed. by L. von Ranke (Leipzig, 1877) がある。この戰爭に充ちた時代に於ける中立國の諸問題は、W. A. Philips and A. H. Reede, Neutrality, Its History, Economics and Law, vol. II, The Napoleonic Period (New York, 1936) に於て研究せられる。イギリスの海上優越權より起こつた弊害を輕視せんとする企ては、J. B. Scott

ed., The Armed Neutralities of 1780 and 1800 (New York, 1918) F. Piggott and G. W. T. Ormond, Documentary History of the Armed Neutralities of 1780 and 1800 (London, 1919) に述べられてゐる。當時の國際的著名事件たるアンギャン公の拉致と處刑に就いては、多くの文獻がある。その事態を正確に再現したものは、S. B. Fay, "The Execution of the Duc d'Enghien," American Historical Review, III (1898), 620—640, IV (1899), 21—37. であり、ナポレオンに責任ありとなす理由ある告發としては、H. Welschinger, Le Duc d'Enghien : l'enlèvement d'Ettenheim et l'exécution de Vincennes (Paris, 1913)、酌量するものとしては、J. Dontenville, "La Catastrophe du duc d'Enghien," Revue des études napoleoniennes, XXV (1925), 43—69. を見よ。カンポフォルミオから、第二次退位に至るまでの、ナポレオンの外交的術策とその結果は、R. B. Mowat, The Diplomacy of Napoleon (London, 1924) に於て、美事に分析された。H. Butterfield は、The Peace Tactics of Napoleon, 1806—1808 (Cambridge, (1929) に於て短かい時期に就き、より大なる洞察とすぐれた文體を以て同樣の研究を試み、またナポレオンの政治的手腕が妨げられざる連續的勝利を得た一八〇〇年より一八〇五年に至る危急な年間に於ける外交的發展は、H. C. Deutsch, The Genesis of Napoleonic Imperialism (Cambridge, Mass., 1938) に於て學問的用意を以て再檢討せられ、明瞭にされた。當時代の終末の諸事件及び歐洲協調に就いては、W. A. Phillips, The Confederation of Europe (London, 1920) 及び C. K. Webster, The Congress of Vienna, 1814—1815, new ed. (London, 1934) が、明晰で、敎ふる所が多い。當時に於ける合衆國の對外關係の主たる危機に就いては、ルイジヤナ問

題に關して上に擧げた諸著を見るべく、また船舶抑留條令に就いては、L. M. Sears, Jefferson and the Embargo, イギリスとの不和に就いては、F. A. Updyke, The Diplomacy of the War of 1812 (Baltimore, 1915) を見よ。

## 九　陸海軍史

一世紀半前の陸戰術に就いて恰好な入門書としては、G. T. Warner, How Wars were Won: a short history of Napoleon's times (London, 1915) がある。より綿密な、詳細な研究としては、T. A. Dodge, Napoleon, a History of the Art of War, from the beginnings of the French Revolution to the battle of Waterloo, 4 vols. (Boston, 1904—1907) が推賞される。Sir Charles Oman, Studies in Napoleonic Wars (London, 1929) は、魅力あり、また權威あるものである。H. Camon, La Guerre napoléonienne: précis des campagnes (Paris, 1903) は、簡潔で、公平であり、賞讃に滿ちてゐる。E. Kessel, "Die Wandlung der Kriegskunst im Zeitalter der französischen Revolution," Historische Zeitschrift, CXLVIII (1933), 248—276. は、分隊及び兵團に於ける徵募兵の新組織に伴つた戰術の變化を專門的用語を避けて活寫したものである。ナポレオン戰爭の個々の局面に就いて、A. Grasset ed., La Guerre d'Espagne, 1807—1813. は、スペイン戰爭に關する、まとまりのない著述であつてその三卷が現はれ (Paris, 1914—1932)、一八〇八年までの戰爭を述べてゐる。フランス參謀本部の歷史課が、この時代に於てすらも、スペインの障碍に打勝ち得るか否かは疑はしく、英語の讀者は Sir Charles Oman, Histoty of the Peninsular War, 7 vols. (Oxford, 1902—1930) を選ぶであらう。イギリス陸軍に關する標準的歷史は、J. W. Fortes-

cue, History of the British Army, 13 vols. in 20 (London, 1899—1930) であり、その三卷より十卷迄が、當時に相當する。最終對佛大同盟に於けるオーストリヤの軍事的努力の公的記錄が、一般讀者のため出版されたものは、E. von Woinovich and A. Veltzé, 1813 bis 1815: Oesterreich in den Befreiungskriegen, 9 vols. (Vienna, 1911—1914) である。海戰に關して、既知の權威書は A. T. Mahan, The Influence of Sea Power upon the French Revolution and Empire, 1793—1812, 14th ed., 2 vols. (Boston, 1919) である。海の支配は、戰爭に於ける決定的要因たりとのマハンの主張は、しばしばそれを過重視するに至らしめた、それは、彼がイギリスと合衆國との間の他の紛爭原因を實際に無視したる姉妹篇、Sea Power in its Relation to the War of 1812, 2 vols. (Boston, 1905) に於ける如くである。ブーローニュ小監家に關する論爭ある問題に就いて、最も完全な研究は、E. Desbrière, Projets et tentatives de débarquement aux îles britanniques, 1793—1805, 4 vols. in 5 (Paris, 1900—1912) である。その問題の最近の秀れた概括は、H. C. Deutsch, "Napoleonic Policy and the Project of a Descent upon England," Journal of Modern History, II (1930), 541—568. である。

## 一〇　精神史及び文化史

十九世紀初葉の英佛獨の思想に就いては、T. Merz, History of European Thought in the Nineteenth Century, 4 vols. 4th ed. (Edinburgh, 1923—1924) が、哲學的な取材で、文體流麗である。主要なる哲學史、例へば K. Fischer, Geschichte der neueren Philosophie, 10 vols. in 11 (Heidelberg, 1897—1904) の四—八冊は特に此處に適用される。美事な著作、H. Höffding, Geschichte der neu-

éten Philosophie, 2nd ed., 2 vols. (Leipzig, 1921) は英譯 (London and New York, 1900) で利用されゐ。E. Friedell, Cultural History of the Modern Age, 3 vols. (New York, 1930) は、二、三卷に於て當時に關する雄辯な記述を含む。美術に關しては、通俗的著作たる E. Faure, History of Art, 5 vols. (New York and London, 1921—1930) があり、その vol. IV on Modern Art は、十七世紀以來のその主題を示唆的な、また理解し易き綜合を以て取扱つてゐる。A. Mathiez 再編の J. Jaurès, Histoire socialistes de la Révolution française, 8 vols. (Paris, 1922—1924), vol. V, La Révolution en Europe はフランスより發したる影響の立派な概觀である。一八〇〇年以後、フランス思想に於ける科學的及び物質主義的學說の力が最もよく研究せられるものは、F. J. Picavet, Les idéologues (Paris, 1891) である。科學的傾向の實際的結果に就いては、A. Fabre, Les Origines du système métrique (Paris, 1931) を見よ。Edward Dowden, The French Revolution in English Literature (London, 1897) は、當時のイギリスの大著作家達を當時フランスの輿論の性質たりし、複雜なる概括論に關係せしめてゐる。A. Cobban, Edmund Burke and the Revolt against the Eighteenth Century (New York, 1929) に於て、反合理主義的精神は、短かき特別研究の方法を以て分析せられ、また C. Brinton は Political Ideas of the English Romanticists (Oxford, 1926) に就き、同樣のことをなした。ドイツの思想に就いては、多數の秀れた研究がある。G. P. Gooch, Germany and the French Revolution (New York, 1920) は、主として當世紀終末に於ける主要なドイツ著作家の書に反映せる知的挑戰と反應の評價である。A. Stern, Der Einfluss der französischen Revolution auf das

deutsche Geistesleben (Stuttgart, 1928)は、ほゞ同一方面を取扱つてゐる。ドイツの政治思想に關して、最近の有能ではあるが、活氣に乏しい著述は、R. Aris, History of Political Thought in Germany from 1789 to 1815 (London, 1936) である。F. Meineckeは、ドイツ思想の反合理主義、特に反機械論的傾向を Die Entstehung des Historismus, 2 vols. (Munich, 1936) に於て綜合した。D. Baumgardtは、神祕主義者の重要性を Franz von Baader und die Philosophische Romantik (Halle, 1927) に於て强調し、R. Haym は恐らく最良の研究たる Die Romantische Schule, new ed. (Berlin, 1928) を書いた。ドイツ文學、哲學及び國民主義の間の密接なる關聯に就いては、秀れた研究、R. R. Ergang, Herder and the Foundations of German Nationalism (New York, 1931) がある。

## 一一　宗教史

政教間に於ける宗教協約に就いては、英語で、明晰な、學問的な特殊研究たる H. H. Walsh, The Concordat of 1801: A Study of the problem of nationalism in the relations of church and state (New York, 1933) がある。フランスの標準的な著述としては、A. Boulay de la Meurthe, Histoire de la négotiation du concordat de 1801 (Tours, 1920), Histoire du retablissement du culte en France, 1802—1805 (Tours, 1925) 及び G. L. M. J. Constant, L'Eglise de France sous le Consulat et l'Empire, 1800—1814 (Paris, 1928) である。一八〇〇—一八一五年の間の法王廳の政策と問題は、閑却せられてゐるが、價値ある蒐集たる、I. Rinieri 編 La diplomazia pontificia nel secolo XIX, 5 vols. (Rome, 1902—1906) に於て研究せられる。

統領政府及び帝政治下に於けるユダヤ人の狀態は R. Anchel, Napoléon et les juifs (Paris, 1928) に於て、綿密に研究せられた。イギリスに於ける當時の宗教的發展に就いて、最も有益な著作は、今なほ、J. Stoughton, Religion in England from 1800 to 1850, 2 vols. (London, 1884) であり、イギリスに於けるローマ・カトリック教徒の狀態に就いては、B. N. Ward, Eve of Catholic Emancipation, being the history of the English Catholics during the first thirty years of the nineteenth century, 3 vols. (London and New York, 1911—1912) がある。ドイツ諸邦に於ける教會領の世俗化、ピウス七世の困難、一八一四年に於ける耶蘇會の再建に就いて、最良の一般史は、F. Nielsen, (英譯) History of the Papacy in the Nineteenth Century, 2 vols. (New York, 1906) 及び J. MacCaffrey, History of theC atholic Church in the Nineteenth Century, 1789—1908, 2nd rev. ed., 2 vols. (Dublin, 1910) である。

## 一二　傳記、回想錄及び通信

當時に關する傳記的及び自敍傳的資料は、あまりに廣範圍にわたるので、本節では、過去十年間の出版になるものを特に述べて、數十冊の注目すべきものゝ表題を擧げるに止めねばならない。

F. M. Kircheisen の記念碑的傳記、Napoleon I sein Leben und seine Zeit は、今や九卷 (Munich 1934) に達し、一八二一年に至るまで敍述を進めてゐる。二卷の簡約本、Napoleon I, ein Lebensbild (Stuttgart, 1927—1929) は、英譯 (Napoleon, New York, 1932) で利用される。始めに擧げた Fournier と Rose の秀れた傳記は、最近、次の如き考察深き研究により補足せられた。即ち J. Bainville, Napoleon (Paris, 1931); E. Tarlé, Bo-

naparte (New York, 1937) 及び L. Madelin, Napoléon (Paris, 1935) であつて、最初の二著は英語で得られる。E. Driault は、La Vraie figure de Napoléon (Paris, 1929) 及び Napoléon le grand, 3 vols. (Paris, 1930) に於て、ナポレオンを彼の時代と關係づけるべく努めた。心理學的研究は、E. Ludwig, Napoleon (New York, 1926) の如く、立派で、洞察的であつても、また D. S. Merezhkovsky, Life of Napoleon (New York, 1929) の如く、神祕的で、示唆的であつても、眞の歴史的傳記と同列に置くわけには行かない。ボナパルト家に就いて、英語の讀者に、健實な詳細な記述が得られるのは、W. Geer, Napoleon and his family, the story of a Corsican clan, 3 vols. (New York, 1927—1929) であり F. Masson により、歴史的價値の鋭い意識を以て Napoléon et sa famille, 13 vols. (Paris, 1897—1919) に於て、さしも徹底的に調べ



られた分野を、概觀するのである。

ナポレオン時代の數名の主要な人物は、後年に新しき傳記作者を得た。G. Lacour-Gayet, Talleyrand, 1754—1838, 3 vols. (Paris, 1928—1931) は恐らく、著者の主題に對する好意を寄せざる態度にも拘らず、決定的な傳記として殘るであらう。Saint-Aulaire, Talleyrand. (英譯、New York, 1937) 及び C. Brinton, The Lives of Talleyrand (New York, 1936) の諸研究の特色をなすものは、輕き親愛的な語調である。スタインに就いては、最近第四版 (Göttingen, 1931) を出した M. Lehmann の議論を起させた傳記は、G. Ritter の著作、Stein, eine politische Biographie, 2 vols. (Stuttgart, 1931) により、訂正せられ、大いに補足せられるに至つた。權威あるものであるが、重厚なるメッテルニヒの傳記、H. von Srbik, Metternich, der Staatsmann und der Mensch, 2 vols. (Munich, 1925) に

續いて出た、より讀み易き諸著は、A. Cecil, Metternich, 1773—1859: a study of his period and personality (New York, 1933) 及び H. du Coudray, Metternich (London, 1935) である。P. Guedalla, Wellington (New York, 1930) は、恐らく、鐵公爵の長き傑出した生涯に關する最も有益な、また確かに最も興味に富む記述として殘るであらう。ピットに就いては、J. H. Rose, Life of William Pitt (London, 1923) なる、彼の初期の研究を綜合した美事な貢獻があり、また通俗的傳記 P. Wilson, William Pitt the Younger (New York, 1934) がある。

十九世紀の初葉に於ける文書及び回想錄の資料は、公刊を續けてゐる。ナポレオンの屬官、例へば最も重要な價値あるものゝ若干を述べるだけでも Chaptal, Gaudin, De Méneval, Miot de Melito, Mollien, Roederer, Savary 及び Thibaudeau の如き人々と、フランスに對する主要な反對者、Hardenberg, Metternich, Archduke Charles, Adam Czartoryski 等を含む人々の寄與により、既に豐富にせられた回想錄の目錄には、過去十年間に三個の注目すべきものを加へた。Mémoires de la reine Hortense, 3 vols. (Paris, 1927) 英譯のやゝ簡約せられた二卷 (New York, 1927) は、歷史的記錄としてよりは、個人的記錄としての興味が多い。Mémoires du général de Caulaincourt, 3 vols. (Paris, 1933) は、これまた簡約された英譯で得られるが、特に露佛關係にとつて、一層價値あるものである。スタイン男の書翰及び記錄類は、遂に E. Botzenhart, ed., Freiherr vom Stein: Briefwechsel, Denkschriften und Aufzeichnungen, 2 vols. (Berlin, 1931—1937) によつて、便利に利用し得らるゝことになつた。最近發表された他の興味ある史料の中には Fürstenbriefe an Napoleon I, ed. F. M. Kir-

cheisen, 2 vols. (Stuttgart, 1929) があり、主にドイツ諸侯の小なる政策、小なる精神の反映として興味ある蒐集である。またさして重要ではないが、Manuscrits de Napoléon, 1793—1795, en Pologne, ed. by S. Askenazy (Warsaw, 1929) が若干ある。Kircheisen は彼の多〳〵の勞作の間に暇を見出して表題、Memoiren Napoleons (Dresden, 1927). F. Collins 譯 Napoleon's Autobiography; the personal memoirs of Bonaparte compiled from his own letters and diaries. (New York, 1931) なる、ナポレオンの生涯の自敍傳的記錄を編纂したが、それは R. M. Johnston 編、The Corsican, new ed. (Boston, 1930) なる、同一構想の活々とした實在的の書と相竝ぶものである。これらの寄木細工に極めて巧みに浮び出されてゐるナポレオンの人格と思想の眞の迫力を感じ、この眞の印象と J. Dechamps, Sur la légende de Napoléon (Paris, 1931) 及び A. L. Guérard, Reflections on the Napoleonic Legend (New York, 1923) に述べられた雲の如き傳說とを對照することは、人と神話とを分てる溝を理解すべき最も容易なる方法である。